

そうじゃ・宮城っ子基金でつながる

相互扶助の絆

「そうじゃ・宮城っ子基金」で支援している宮城県石巻市の亀山紘市長が10月30日、来総。総合福祉センターで市民や市職員ら約200人に「石巻市のいま」と題して講演しました。

亀山市長は、東日本大震災で被害を受けた石巻市の



講演をする亀山紘市長

現状を説明。「いまだに仮設住宅に住んでいて、不自由な生活を送る人が大勢いる。被災者を最後の1人まで支えるシステムが必要となる」と、地域内の連携、組織づくりといった減災と共助のためのソフト面の充実や今後のまちづくりの展望を熱弁しました。

講演後には、亀山市長と特定非営利活動法人AMDAの菅波茂代表、片岡市長で「地震災害への備えと助言」をテーマに対談。南海トラフ巨大地震が起

きた場合など、激甚災害発生時に対処できるための、お互いが支え合う仕組みづくりなどについてディスカッションしました。

総社市では、市民からの義援金で「そうじゃ・宮城っ子基金」を創設。東日本大震災によって両親を亡くした宮城県の子どもたちに毎年10万円ずつ、5年間送る支援を続けています。

「そうじゃ・宮城っ子基金」を通じ応援している石巻市の子どもは26人。東日本大震災からの復興にはまだまだ時間が必要です。市は、今後も「そうじゃ・宮城っ子基金」だけでなく、できる限りの支援を、息長く続けていきます。

亀山市長からのお礼メッセージ

東日本大震災後、初めて総社市にお礼に来ました。総社市民の皆さんに、お迎えをいただきまして本当にありがとうございます。

東日本大震災で、石巻は最大の被災地になりました。特に総社市からは「そうじゃ・宮城っ子基金」を設立し、石巻市で震災の孤児になった多くの子どもに対し、育英資金を提供していただいております。本当に子どものこれからの将来に大きな力になってくれると思っております。

将来を担う子どものために本当に総社市の皆さん、関係機関の皆さん、そして義援金を寄せていただきました皆さんに心から感謝を申し上げます。

固い絆で結ばれていることを誓う亀山市長(中央)、菅波代表(右)、片岡市長



雪舟が結ぶ災害相互支援の絆

雪舟サミットinそうじゃ

画聖雪舟の業績を顕彰し、雪舟を通じた友好の輪を広げる雪舟サミットを、10月27日、井山宝福寺で開催しました。雪舟ゆかりの地である井原市、山口県防府市、島根県益田市、広島県三原市、山口市と総社市

の6市の市長や教育長が出席。また、市内外からの希望者を含め約250人が参加しました。参加者は雪舟に対する理解を深め、ゆかりの地同士の絆をますます確かなものにしようと、思いを一つにしました。

サミットは倉敷芸術科学大学の濱家輝雄教授を総合司会に、吉備国際大学の守安收教授の「雪舟の生誕地・総社」と題した基調講演やサミット会議などが行われました。また、子ども水墨画展と水墨画展はがき

展の表彰も行われました。サミット会議のテーマは「雪舟でつながる自治体の機動的な災害支援ネットワークの形成に向けて」。井原市長、山口県防府市長、島根県益田市市長、広島県三原市長、山口市教育長と

サミット宣言をし、雪舟によって結ばれた絆を確認する瀧本井原市長、松浦防府市長、片岡総社市長、山本益田市市長、天満三原市長、岩城山口市教育長【写真左から】



総合司会の濱家輝雄倉敷芸術科学大学教授、会場となった宝福寺の小鍛冶元慎住職、講演をした吉備国際大学の守安收教授【写真左から】



子ども水墨画展最優秀賞の上田真帆さん(神在小6年)、水墨画展はがき展最優秀賞の出井佳与子さん(泉)、水墨画展はがき展小林東雲賞の筒井早由美さん(新本)、片岡市長、小林東雲さん【写真右から】

総社市長が、災害時の相互支援について議論しました。その後、「雪舟によって結ばれた絆を大切に、機動的に相互支援するシステム作りを努めます」とサミット宣言をしました。

アトラクションでは水墨画家小林東雲さんが箏奏者 景子さんとピアニストの妹尾美穂さんが奏でる音楽に乗せて、水墨画パフォーマンスを披露しました。



箏奏者 景子さんとピアニストの妹尾美穂さんが奏でる音楽のなか、縦2m、横8mの巨大和紙にダイナミックに山水画を描く小林東雲さん(写真左)。完成した山水画(写真上)